

2020年12月20日 大井バプテスト教会 礼拝説教

説教題「愛で導く救い主」ルカ1章68～70、76～78節、第一ヨハネ4章9節

主任牧師 加藤 誠

「この憐れみによって、高い所からあげぼの光が我らを訪れ、暗闇と死の陰に座している者たちを照らし、我らの歩みを平和の道に導く」(ルカ1章 78～79 節)。

アドヴェント（待降節）の二本目のローソク、「愛の灯」に火が灯されました。イエス・キリストが私たちの心に灯してくださった「愛の灯」とはどのような灯なのでしょう。ルカ 19 章に、主イエスとの出会いによって百八十度人生を変えられた男ザアカイが紹介されています。それまで「憎しみの倍返し」に生きてきたザアカイが「感謝の倍返し」に生きる男に変えられたお話しです。

ザアカイは大変な金持ちでしたが「背が低かった」と聖書は記しています。聖書が身体的な特徴を書き記しているのは非常に珍しいことですから、よほど目立って背が低かったのでしょう。そのためザアカイは幼いころから周囲の人びとから蔑みといじめを受け、その心に深い傷を負って育ったのではないかと想像します。そしてザアカイはその劣等感を克服するために徴税人の頭としての地位を獲得しようと人一倍努力したのではないかと想像します。徴税人の頭になることはローマ帝国の手先となってユダヤ民衆の「敵」となることを意味しましたが、ザアカイは取税人の頭である自分の前にひざまずき、ひれ伏す人々の姿を見ることで、大きな優越感を得ることが出来たことでしょう。また「これで何とか勘弁してください」と頭を下げる人々に対して、「いやダメだ。許さない！」と厳しく税を取り立てることで、人々がザアカイを差別してきた間違いを認めさせ後悔させようとしたのではないかと想像します。つまり「憎しみの倍返し」をもって「ザアカイの正義」を人々に思い知らせようとした。そのように劣等感の裏返しである優越感を求め「憎しみの倍返し」で人々を見返そうと生きていた男。それが主イエスと出会う前のザアカイでした。

そのザアカイの耳に奇妙な男のうわさ話が入ります。ユダヤ教の新しい教えを説き、徴税人たちと親しく食卓を共にしているイエスという奇妙な教師がいるということです。ザアカイが知っているユダヤ教の教師たちは決して徴税人には近寄りません。徴税人に蔑みの視線を上から浴びせ、あからさまに無視をするのがふつうでした。「徴税人と食卓を囲む教師がいる？ いったいどんな男なのだ？」。そのイエスを一目見たいと出かけていったザアカイでしたが、イエスを迎えるために沿道に並んだ群衆に阻まれてしまいます。ふだん過酷な税を取り立てて自分たちを苦しめているザアカイに、この時とばかり人々は冷たく仕返ししたのでしょう。仕方なくザアカイは恥を忍んでイチジク桑の木に登り、イエスを一目見ようとしみます。まるで子どものように枝にしがみつく姿は、大の大人として情けない姿だったことでしょう。ところが思いがけないことが起こります。立ち止まった主イエスが「ザアカイ、急いで降りてきなさい。今日は、ぜひあなたの家に泊まりたい」と声をかけたのです。

このイエスの慈しみに満ちたまなざしと優しさあふれる一言こそ、ザアカイが必要としていたものでした。自分のことを一人の人間としてまっすぐに受け止め、「友」として対等に向かい合ってくれる、イエスのあたたかい笑顔のまなざしに触れて、ザアカイの心の奥底でうずいてきた劣等感は癒され、彼の心にあふれていた憎しみと憤りも溶かされていきます。それまで人々に向けてきた「憎しみの倍返し」は神さまへの大いなる感謝に変えられたのです。ザアカイはその喜びから、「主よ、わたしは財産の半分を貧しい人々に施し、だれかから何かだまし取っていたら、それを四倍にして返します」と約束します。わたしはこの「四倍」の意味するところが以前からずっと理解できずに来たのですが、今回、ザアカイが人々への「憎しみの倍返し」に生きてきたことを思ったときに、ザアカイはその「憎しみの倍返し」を「感謝の倍返し」、つまり「倍の倍で四倍の感謝」に変えられたのではないかと…ということに思い至りました。

しかし、その主イエスがザアカイに愛を注いだ行為は大きな代償が伴いました。ユダヤの人々の「敵」であるザアカイの家に泊まった主イエスは、ザアカイに向けられてきた大きな蔑みのまなざしをも一緒に受けることになったからです。ザアカイの「友」となったために、主イエスの十字架は決定的になったと言っても過言ではありません。冷静に考えれば「イエスさま、こんなザアカイのためにあなたは大切な命を捨てられるのですか？そんなことがあってはなりません」というところです。しかし主イエスは「この男も、神に愛されている大切なアブラハムの子なのだ！」と言い抜き、他の人々に向けるのと同じ愛を注がれたのです。

神の愛は、自分が損をし傷つくことを引き受けていく愛です。神の愛は、罪人の頭であるザアカイを生かし共に生きる愛です。その真実の愛に触れたザアカイの心に、一人ひとりを愛において生かし、救いに導きたもう神への感謝があふれ、「憎しみの倍返し」は不要となり、「感謝の倍返し」が起こされていったのです。

この主イエスがあらわされた神の真実の愛こそ、私たちが平和の道に導くものではないでしょうか。昨年、アフガニスタンで凶弾に倒れた中村哲さんは「平和とは笑顔でみんなで食卓を囲むこと」と語りました。そのような平和はどのようにして実現できるのでしょうか。まず頭に浮かぶのはお金であり、ごはんを分かち合うための社会システムの変革かもしれません。しかし第一に必要なのは、「真実の愛を学ぶこと」ではないでしょうか。劣等感の裏返しである優越感を求め、憎しみの倍返しに生きる私たちの自己中心の貧しい愛では、笑顔どころか毎日悲しみしか生み出せず、憎しみの連鎖から抜け出られないからです。お金やシステムの前に、私たちが「愛で導く救い主」を私たちは切実に必要としているのです。

世界で最初のクリスマス、私たちが何よりも第一に必要な「愛の灯」を神はおくってくださいました。私たちが照らし、私たちが平和の道に導く、その「真実の愛の灯」による光を大切に受け取っていきたいのです。